



DVD『横濱ウイナー』より/2007年@パシフィコ横浜



Kyoto und Wien

音楽は、旅をする。

京都とウィーンのミュージシャンを繋ぐ、幸せな出逢い。

by 『くるり』



Quiruli

2007年12月、横浜みなとみらいにあるパシフィコ横浜 国立大ホールで2夜にわたり1万人の聴衆を酔わせたコンサートが開かれた。ステージ向かって左側にはオーケストラ、指揮者、そしてコーラス。右側には、ベースやキーボード、そしてドラムなどが並ぶユニークな舞台セッティング。音楽を奏でたのは、京都出身の人気ロックバンド『くるり』とウィーンから来日したクラシックオーケストラ『ウィーン・アンバサダー・オーケストラ』という異色ではあるけれど、とにかく素敵なお組み合わせのミュージシャンたちだった。この忘れがたきステージが実現したのは、そもそもウィーンへの旅がきっかけだった。そして、このコンサートはフィナーレではなく京都とウィーンのミュージシャンの幸せな出逢いを機にその後何年もつづくことになる物語のプロローグに過ぎなかった。

Photos: Susumu Yasui Text: Ayako Ito
撮影協力: Vienna/Swoon Factory Music Studio Tokyo/ON AIR Okubo Studio

ウィーンでレコーディングをしよう

始まりは、くるりのヴォーカル&ギタリストで、ほとんどの楽曲の作詞作曲を行っている岸田繁さんのウィーンへの旅だった。旅が好きで、ヨーロッパの色々な国を訪れてきた岸田さんが、まだ中欧には行っていなかったという理由で立てた旅のプラン。

「元々は、チエコやハンガリーにも近く交通の便利なウィーンを拠点にして、中欧を旅しようと思っただけなんです。でも、行ったらもうウィーンから出なかつたんですね。その時、ウィーン・フィルの良い席がたまたま取れて、最前列の左側の席だったんです。演目はモーツァルトの40番と41番で、指揮者はニコラス・アーノンクールでした。彼の名前は存じ上げていましたが、熱心なファンというわけではなかったんです。でも、ウィーンで生の演奏を聴いてすごく好きになりました。びっぴりする位良いコンサートだったので」

クラシック音楽好きの父親の影響で、幼い頃からクラシックに親しんでいた岸田さんにとって、ウィーンの楽友協会ホールで聴く世界最高峰の音楽は強烈に心に響いたのだ。そして、ザルツブルクに行った以外はずっとウィーンに滞在し、小さなコンサートなどを回って過ごした。ウィーンでの音楽体験がひとつのアイデアを生み、日本に

帰ると早速、バンドメンバーの佐藤征史さんにその思いを伝えた。ウィーンでレコーディングをしよう。

「色々な場所でのレコーディングをしてきたけど、自分もウィーンにはまだ行ったことがなくて。それならみんながウィーンに行って、どんなスタジオを拠点にできるか見てこようと、スタッフも一緒に出かけました。その時、ゲルギエフ指揮シオスタコヴィチの4番を楽友協会ホールで聴けたんです。コンサートが素晴らしかったという話は繁くんから聞いていましたがそれが本当にすごく衝撃だったんです。こんなことを味わえる国って、本当にすごいなと思って。あと、ウィーンの街全体で感じたのが、音楽がすごく大事にされて

ウィーンに滞在して自分たちが感じていたことが、彼らを呼んできた気がする

いるなということですね。BGMにならないので。カフェもほとんど無音じゃないですか。音楽は自らが聴きに行ったり感じに行ったりするものと、それぞれの場でちゃんと扱われているんだなと思いました」

——こうして2006年12月の現地視察を経て、翌年2月、くるりとスタッフたちはその後3ヶ月にも及ぶ

ウィーンへのレコーディングに旅立った。ウィーンのスタジオをベースに、ドイツ人コーディネーター、フランス人プロデューサー、地元オーストリア人のスタジオオススタッフ等とインターナショナルなチームを組んでのアルバム作りが始まった。1枚のアルバムを作るには、幾層にも重なる工程を辿る。作曲、作詞、バンドでのアレンジ作業、ドラムやベースによるベーシック録音、ヴォーカルや弦楽器などベースに重なっていく音の録音とタビング、編集、ミキシング、マスターリング。いずれも機器に任せきりでできるものではなく、作り手たちの耳、声、技、感性、知識を集結して進めていく職人仕事のような作業を経て1枚のアルバムが形になっていくのだ。

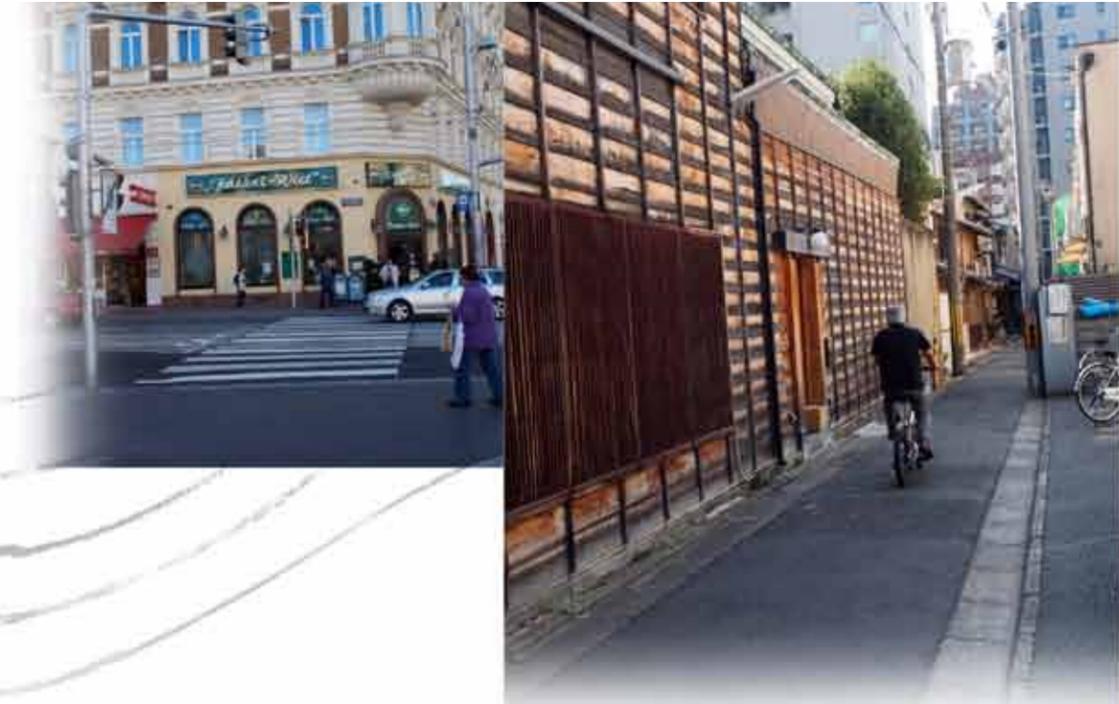
オペラ座の横のアパートを借りて、そこからスタジオに通う日々が続く中、時間を作ってはコンサートに通い、ドイツ語の単語も覚えながらウィーン生活に馴染んでいった。そうしてひと月、ふた月とウィーンの水を飲み空気を吸い、人々と交流して暮らしていくことでインスピレーションが与えられ、それは彼らのアルバム作りにも影響を与えはじめた。そんな中で、くるりに



Shigeru Kishida: うん、うん。



Masashi Sato: ウィーンは、音楽が大事にされているよね。



Dieter: 音楽も必要だけど、グッドエンジニアにあふれる感じ。



Filip: 悪を聞け放った気持ち良い夏の日みたい。くるりの歌は昔もなまなま好き。



FanFan: 嬉しいです。

2011年、同じ京都出身のファンファンさんが紅一点メンバーとして加わった。ロックバンドには珍しいトランペット奏者だ。くるりのメンバーになって、すでに2回ウィーンを訪れている。ディーツさんが言っていた。「ファンファンは素晴らしいミュージシャンだね。音楽に聴き入っている時の表情がすごいんだ。繁も歴史も音楽に対してはすごくシビアで、自分たちの音楽に何を望むのかをよくわかっている。そんな彼らのファミリーの一員としてやっているファンファンは、一緒にそれを追求できる素晴らしいミュージシャンということだと思う」

とてかけがえのない仲間となるディーツさんとフリップさんの出逢いが訪れたのだ。

ディーツさんは、プロのレコーディング・ミキシングエンジニア、そしてプロデューサーで、ミュージシャンでもある。フリップさんは、ウィーン・フィルと共にオーケストラを代表するオーケストラ、ウィーン交響楽団のパーカッションリスト。団員としての活動の他に、作曲やアレンジで音楽のジャンルを問わず広く活躍している。

今回、ウィーンでディーツさんとフリップさんに会い、彼らにとつてのくるりとの出逢いについてお話を聞かせてもらった。そして東京ではくるりの3人に、ウィーンで聞いたふたりの言葉を時に伝えながら、彼らの思いをじっくりと語ってもらった。

最初の出逢いは、姿なき音。スピーカーから風が出ているのを感じた

岸田@東京(以下同じ): 下見でウィーンのスタジオを見学している時に、たまたまディーツがミキシング兼共同プロデューサーをやったCDを聴かせてもらった。それがあまりにも良くて、その時に、彼と仕事したい、とすごく思ったんです。でも、プロデューサーはすでにフランス人のアルフという人に決まり、彼がミキシングエンジニアを

に、彼らはモーツァルトやベートーヴェンなどのクラシック音楽も好んでいました。僕はここウィーンで生まれ育ち、いつも音楽に囲まれていたので、くるりが求めるものを理解することは高いハードルではありませんでした。

僕にとつて、彼らとあの様に出逢えたことはすごく幸運だったと思っています。まるで昔からずっとそこにいて、懐かしい友だちに再会するような感じで、初めから繋がりを感じました。

岸田: プロデューサーはフランス人、コーディネーターはドイツ人、スタジオにはオーストリア人やブルガリア人、ウクライナ人もいて、国籍も年齢もバラバラでした。そういう現場でコミュニケーションをとるためには、自分たちからオープンにならなくてはダメだと思っ、彼らといる時も日本人だけの時も、日本語を一切禁止にして英語とドイツ語のみにしよう、と提案したんです。そうすることで、国籍や年齢を超えて、全員で音楽というひとつのものに向かっているようになりました。

だけど、特にディーツとフリップのふたりに関しては、本当に会話がいらなかったんです。最初に、こういうことをやってほしい、っていう話すらしていないのに、自分たちが思っているベクトルの何倍も遠くにあるような答えがすつと返ってきて。会話がいらなかったと言っても、もちろん音楽を使っ

することも決まっていたんです。でも、どうにも僕たちはあの時聴いた音が忘れられなくて。それで、「ジュービリー」っていう曲を作った時に、どうし

「音楽」という言語で始まった会話。ことばがなくても理解しあえた

でもディーツにもミックスをして欲しくて、とにかく打診してみたら「ぜひ」と言ってくれたんです。

その「ジュービリー」のミキシングができた時、僕は他の作業をしていた途中で、先に聴きに行ったディレクターたちが「すごいよ、すごいよ、スピーカーから風が出ているよ」って興奮しながら帰ってきて。僕らも実際に聴いてみたら、本当にスピーカーから風が

出ているのを感じたんです。こんな風に、ディーツ本人に会う前に僕たちは一緒に仕事をして、彼は僕たちの音をあげてくれました。

佐藤@東京(以下同じ): 当初の予定より大幅に滞在が延びていて、プロデューサー兼エンジニアがもうパリに帰らなアカンってなったから、「ブレイメン」など他の曲もディーツと一緒にレ

会話をしていた部分はあるんですけど。我々も、中々そういう出会ってあるものじゃないって、多分彼らと同じように思っていて。世界にも日本にも、彼らのことを借りるなら、懐かしい友だちっていつの間にか、同志っていつの間にか、会つと花がパッと咲いていくような人っているじゃないですか。彼らが最もそういう人たちのかもしれない。

ディーツ@ウィーン(以下同じ): アルバム作りをとおして、僕たちは互いの信頼を更に深めていったんです。くるりは、音楽的に意味のないことは決して要求してこない。彼らの音楽的ビジョンは素晴らしいと知っているから、ここをこういう風にかえてほしい、と言われればすぐに応えるし、逆に自分も提案をすれば、彼らも聞く耳を持ってくれました。もうひとつ、彼らにとつてラッキーなのは、くるりはバンドとしてだけでなく素晴らしいチームであり、最高のマネージメントスタッフを持っていることでした。

——春を迎えた頃、ウィーンでのアルバム作りが終わり、やがてくるり7枚目のアルバム『ワルツを踊れ』が完成した。そして同年の12月、『ワルツを踊れ』の世界観が、ウィーンのオーケストラと共にバシフィコ横浜で再現され、くるりが3ヶ月に及ぶウィーン滞在で得た素晴らしい音楽と友情の証が幸運な観客たちに披露された。その時の

コーディングをして、ミキシングも彼にやってもらうことになり、ウィーンとパリのスタジオがパラレルに動いていくことになりました。

岸田: フリップは、レコーディングをしていたスタジオのオーナーに紹介してもらったんです。

フリップ@ウィーン(以下同じ): スタジオのオーナーをしている友人からある日電話があり「日本のミュージシャンが曲に管弦アレンジをつけたいと言っている。曲を送るから聴いてみてほしい」と言われました。作曲はいつもやっていることだし、面白そうだったからすぐにOKしました。「ジュービリー」のアレンジを書いてスタジオに行くと、繁と歴史はコンサート帰りでスーツではっぱり決めていて、自分はジーンズにスニーカーだったから、WOW、僕だけアンダードレスだ！って焦ったのを覚えていますよ。僕は普段からクラシックだけでなく、ジャズやロック、ポップ音楽を色々な国のミュージシャンとやっているんで、くるりと仕事をするのも極自然なことでした。まずは音楽という言葉で会話を始めたんです。くるりの曲は力強いメロディーとコード進行で、僕にビートルズを思い出させました。それ

ことを、ディーツさんが懐かしそうに話してくれた。

「横浜でアンコールの最後の曲にもなった『ブレイメン』は、信じられないくらい素敵な楽曲です。あの曲は2度演奏されました。ライブの1曲目として演奏した時は、みんなまだ緊張していて譜面に忠実に演奏していたけど、2時間後にアンコールで演奏した時には、まるでステージでパーティーをやっているみたいで。僕はステージ裏で観ていましたが本当に素晴らしい。あの場での全ての瞬間を楽しみました。そして、あのライブのDVD制作では、くるりは僕にプロデューサーのクレジットを与えてくれて、そのことをとても名誉なことだと思っています」

舞台上で演奏された曲の管弦アレンジを行ったフリップさんは、3人目のお子さんが生まれるため来日できなくなりました。岸田さんは、そのことも振り返りながらこんなことを話した。

「フリップが来られなかったのは残念でしたが、3人目の子供が生まれるというその知らせはとても嬉しかったです。ホントに彼は嬉しそうに顔をくしゃくしゃにさせていました。そして、彼の素晴らしいプロデュースでプロダクションやリハーサルも万全の体制を作ってくれていたのが、横浜では彼と一緒に演奏しているようなものでした。あのステージで感じていたのは、誇らし



左はディーツさん、右がフリップさん
ウィーンのSwoon Factory Music Studioにて。

い高揚感、多幸感、綱渡りのような緊張、真っ直ぐな気持ち。冷静沈着。音楽と一体になった瞬間でした」

そして、常にオーケストラメンバーと楽しそうに目を合わせながら、ペースを奏でていた佐藤さんはこんな風にステージを振り返る。

「横浜のライブでは、収録が入っているの間違えたらいけないとか、なんかこの音が聞こえにくいとか、そういう負の感覚が不思議なことに全く無くて、全てがポジティブに音を楽しんでいただけの時間でした。指揮者ってすげえな〜とかアホな事も思っていたんですが、ライブ後にこれまでお世話になつてきた方たちとお話ししている間に、本当に今までの活動に対するご褒美をもらったんだなという感覚になりました。そんな感覚はそれまでもそれからもう味わったことの無いものです。そんな自分たちにとって偉大な時間を共有させてくれたアンバサダー・オーケストラの皆は本当に大切な宝物になりました。また味わいたいですね」

美しいと思えることが共通している

岸田：フリップはクラシックのパーカッションプレイヤーですけど、作曲家として僕ほんまに彼のファンなんです。楽団での彼の演奏は聴いていたんですが、作曲家としての彼を知らない時に

じるものすごく近い気がします。今回新しいアルバムで一緒にミックスマスターの仕事をした時も、そこはぶれずにあるんです。

——その新しいアルバム制作では、2011年にメンバーとして加わったファンファンさんもウィーンでのレコーディングに初参加した。

ファンファン：『ワルツを踊れ』は大好きな作品で、初めて聴いた時から圧倒され通しました。それをくるりと一緒に作つたおふたりに会うことを最初は不安に思っていました。英語もろくに話せない私が、ウィーンでトランペットを吹いて本当に大丈夫なのだろうか？それ以前に、しっかり挨拶できるだろうか!?と、ものすごく緊張したのを覚えています。

でも、いざレコーディングがスタートすると、そんな不安も消し飛び「いい音楽を作ろう」という気持ちで伝わってきました。やっぱり同じなんだと安心すると同時に、その真摯な態度に心打たれ、彼らが大好きになりました。音楽は共通言語になり得る。という今まで殆ど受け流していた言葉を初めて体感したような気がします。

ウィーンでの再会の場面ではどの方も非常に喜んでいて、素敵な時間をたくさん共有されていたのだなと感じました。そして、そんな彼らから奏でられる雄大で澄んだ心地いい音と一緒に

一緒に『ジュービリー』の作業をしたんですよ。最初PCでデモを聴かせてくれた時、まあビックリして。その畑の人と仕事するのは日本人も含めて初めてだったので。彼って僕の中ではちょっと、不思議ちゃんなんですよね。すごくいい人やけど、なんかこう、血液型とか知らんけど、頭のいい人だしすごくチャーミングな人ですし、柔らかい感じの人やけど、なかなかいい意味で不思議な人になって思ってた。ストレンジなんじゃなくて、不思議な魅力のある人なんです。一般的な音楽の色とかかそういうんじゃない、誰も見えないようなところをポンとついてくるような魅力が彼の音楽にはあって、僕はことごとくそれにやられてるんですよ。これ気持ちいいでしょ？っていうのをやっちゃうと、ベタにはなるんですけど、ひとつ素材が悪くなるっていうことがあります。でも彼の場

音楽を理解しようとする時、とても近い感覚を、持つていけるような気がします

合は、本当に良いものが、輝くものとか、触つたら質感の良いものとか、そういうことをすごくよく知っている人で、そういう人が色んなジャンルで色々なことをやっているので魅力なんです。

に、私もとても貴く楽しい時間を過ごすことができました。彼らのことを心から尊敬しています！

佐藤：知らないものって、音で表現できなと思うんですけど、ウィーンのみんなと一緒に音を鳴らさせてもらう時、お互いが違うものをイメージしているのかもしれないですけど、何かそれを自分たちの、例えば自分が生まれ育つた環境に置き換えると、あの感覚に近いなっていうものを感じることはできると思うんです。それがクラシック音楽の中だけで知っている感覚やったりするのもかもしれないし、あるギタリストがこういう音を奏でていたら、この人はこんな所に住んでいるんやろなっていうイメージなのかもしれないんですけど、そういうことがウィーンの人って自分たちの感覚と近いと思うんですけど、それはあえて言いますけど、アメリカ人よりも絶対共有できる部分が多いと思うんです。だからこそ、自分たちが昔から知り合いやつたみたいっていう感覚がある。

日本人って戦争に負けているから分からないですけど、自分のすべてを出すという感覚がないじゃないですか。でも、そこを踏まえて人と付き合っていく、互いを認め合っていくという感覚が、多分日本人にとっては普通やないかと思うんですけど、ウィーンの人にもそれに近いものを持つてはると思えます。ベースには、リスペクト、というもの

僕はフリップの管弦アレンジのデモを最初に聴いた段階で、ツボと書かれたボタンをいくつも押された気がしました。ちなみに、『ジュービリー』のピアノも、フリップによるものです。ただ、これは譜面を書いたものではなく、アドリブで弾いてもらったものを、1小節や2小節単位で細かく編集しながら作っていったものです。骨の折れる作業でしたが、彼との仕事の中で最も印象深い出来事でした。彼は素晴らしい作曲家で、ピアニストでもあるんです。新しいアルバム『THER PIER』では、彼から学んだ色々なテクニックや手法を取り入れながら、自分自身で管弦アレンジをやった楽曲がいくらか入っています。冒頭の『2034』を聴いたフリップは、僕の

成長をととても喜んでくれました。

ディーツとフリップのふたりに関して、すごく思うんです。美しいものの答えってひとつではないですよ。色々なものが美しいって言えますし、物は捉えようですよ。でも、彼らが「美しい」というものにはひとつ共通している部分があつて、そこがくるりがそう感

がやっぱりあつて、そこから始まる関係性というのがちゃんとできている。それが、音っていうものでも感じ合えるのかなと、ええように解釈しています。

最高の仕事をしてその信頼に応えたいと思える

ディーツ：くるりの音楽はすごく特別。色々なものが混ざり合っている。様々なところから影響を受けて、それを煮詰めていってまったく独自のものに変えていくんです。初めて聴く曲でも耳に心地よく、まるで長年聴きなれたフォークソングのようにすつと入ってきて、サビのメロディーも覚えやすいから、1日中頭の中で流れ続ける。何て表現していいかわからないけれど、彼らは何か目に見えないフィルターのようなものを持つているのかもしれない。

フリップ：ある意味彼らは、京都のカルチャーのアンバサダーなのかもしれないね。日本の京都の文化を受け継ぎながら、それを新たなものに変換しているの。彼らがウィーンを好きな理由のひとつは、京都とウィーンがどこか似ているからかもしれないね。どちらも小規模ながら古い歴史と文化がある街だから。

ディーツ：日本にも京都にもとても

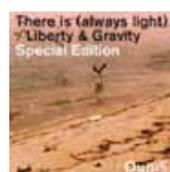


くるり
岸田繁 (Vocal, Guitar)
佐藤征史 (Bass, Vocal)
ファンファン (Trumpet, Keyboard, Vocal)
1996年9月頃、立命館大学(京都市北区)の音楽サークル「ロック・コミュニン」にて結成。古今東西さまざまな音楽に影響されながら、旅を続けるロックバンド。

〈くるりアルバム紹介〉



『THE PIER』
2014年9月17日発売
(初回限定盤) VIZL-719 ¥5,000 (+ TAX)
(通常盤) VICL-64167 ¥2,900 (+ TAX)
SPEED STAR RECORD

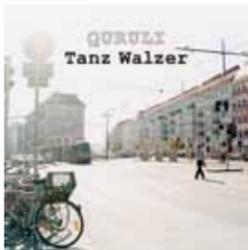


『There is (always light)/Liberty & Gravity』
Special Edition
2014年12月17日発売
初回限定盤 DVD付き VIZL-764 ¥1,600 (+ TAX)
通常盤 VICL-37008 ¥1,200 (+ TAX)
SPEED STAR RECORD



企画アルバム『くるりとチオビタ』
2014年12月17日発売
VICL-64272 ¥1,980 (+ TAX)
SPEED STAR RECORD

ウィーン滞在の後半に暮らし、『ワルツを踊れ』のジャケットにもなったレンヴェーグの現在の街並み。



ウィーンでレコーディングしたアルバム『ワルツを踊れ Tanz Walzer』

もこのコラボレーションがずっと続いたら、とても嬉しいですね。
岸田：去年久しぶりにみんなでウィーンに行ったんですけど、同窓会みたいにみんな集まってきたんですけど、歓迎してくれました。ウィーンで集まった時にいつ

も行くレストランがあるんですよ。コンツェルトハウスの近くにあつて、ウィーン交響楽団の人も常連なんです。みんなとそこに行くことまるでホームに帰ったような感じで、「自分たちもここでこの人たちと一緒にがんばって仕事したいな」というか「一緒にラグビー部で頑

張ったよね」という感じなのかもしれないけど、とにかく彼らに会ったらすぐに思い出せることがたくさんあって。今もディーツやフリップの写真見ただけで、今いちばん遠くにいる友達っていう感じがしています。



それを当たり前前のことだとはいえない

まるでホームに帰ったような感じ

行きたいですね。くるりとはふだん、メールやスカイプというバーチャルな環境で仕事をして、2、3年に一度会う。地球の反対側と考えるような遠くにながら、まるで隣の部屋にいてファイルを渡すような感覚で。こんな風に仕事ができることを時々不思議に思うけれど、すごくうまくいっている。
フリップ：お互いを信頼して仕事ができているからだね。今の時代、互いを信頼できるって、すごく素敵なことだと思う。
ディーツ：きつと、僕たちは彼らにぴったり合っていたんじゃないかな。
フリップ：くるりが僕たちを見つけてくれ、彼らが必要としていることと、僕たちが与えられることがマッチした。
ディーツ：このコラボレーションで素敵なのは、彼らが日本人だからなのか、くるりだからなのかかわからないけれど、とにかくミュージシャンとして仕事をオーダーする立場であっても、いつもこちらと同じ目線に立ってってくれていることです。そして僕たちの仕事を信頼してくれている。だからこそ、自分たちも最高の仕事をしてその信頼に応えたいと思える。

フリップ：ありのままの自分が求められているということだよな。
ディーツ：そう、自分らしい最高の仕事をすることを求められ、承認されている。それは今の時代ものすごく希少なことからね。
フリップ：彼らとの間に感じたものは、音楽的な繋がりに上にもっと精神的なものでした。それは、会った瞬間に感じるエネルギーのようなもの。とても良いエネルギー、それも強い。
ディーツ：そのエネルギーって、彼らの集中力にも言えるんじゃないかな。何かをやっている時、それにもすごく入り込んでいく。特にアルバムを作っている時の彼らの集中力は印象的です。
例えば、今回の新アルバム『THE PIER』は、様々なアイデアをどう合わせていくかを最後まで模索しながら、新しい世界を体験しているようなイメージ。まるで行き先の決まっていな旅のような。とにかく前へ動き出し、どこまで到達するかやってみようという感じ。でも、いざ目的地を見つけたら、そこに到達するまで簡単にあきらめない。あらゆることを試し、もし気に入らなければ2回でも3

回でも最初からやり直し、それでもまだダメなら新しい方法を試していく。
フリップ：それは価値ある挑戦だよな。色々な道を探り、スタイルを試し、そのリスクをとる。常に二歩前へ前進し発展していく。ひとつの場所に安住することなく、新しい道、新しいことを求め続けている。僕らは彼らのそんなところが好きなんです。
ディーツ：例えば今かけているこの曲、『glory days グローリーデイズ』。これは、前作のアルバムの最後の曲だけど、これを聴くたびに必ず鳥肌が立ってしまう。まるで飛行機のように高く高上がっていくこの感じ、これが無性に好き。彼らの音楽は僕の日常生活の中で流れているし、子供たちも気に入って口ずさんだりしています。
フリップ：くるりの音楽は、僕にも色々な変化を与えました。作曲の仕方にも、聴くことにも普段の生活にも。何かが心に触れてくる。
ディーツ：遠い日本のアーティストが、自分たちと一緒に仕事をしたいと何年経っても思ってくれること、この事実に感謝しています。それを当たり前のことだとはいえないし、むしろ特別なこととして誇りに思っています。
フリップ：そしてそのことをいつも認識していただいですね。なぜなら、それは過去7年間の道のりが正しい方向に進んでいたことの証だから。これから

～くるりにとってのウィーン～

ファンファン：私はウィーンに住みたいです、何度でも行きたいです。初めてウィーンに行ったのは2月で、ドナウタワーに登ってみたら、雪が積もって寒くて誰もいませんでした。そして夏にまた行ってみると、タワーのまわりの公園がものすごく広くて、もう森って感じで。その時、その場所には日本から寄贈された千本桜があると聞いたので、今度は桜の季節に行きたいなと思っています。



佐藤：ウィーン空港って外国なのに、あんなに落ち着く空港はないですね。

音楽的にも、ものすごく大きなハブだと思うんです。ウィーンだけ行ってもあれだけ色々な国の音楽を味わえるし、そこから旅立つこともできますよね。でも、ウィーンはハブではあるけど「帰ってきたい場所」という感じです。



岸田：最初はね、ハブだと思って行ったんです。実際に色々な国にも行きました。でもやっぱりウィーンって「お風呂」みたいな感じ。「あー、やっぱりウィーンよね」と。何かあるんですよ、気の知れた友だちや仲間がたくさんいるということもあるし。バーデンに風呂に入りにも行ったけど(笑)、やっぱりウィーンがいい。長い人生やと考えたら、街として居心地が良くっていちどは住んでみたいと思う場所です。

